

令和 4 年 2 月 14 日

若手研究者海外挑戦プログラム報告書

独立行政法人日本学術振興会 理事長 殿

受付番号 202180181

氏 名 江原 聡子

若手研究者海外挑戦プログラムによる派遣を終了しましたので、下記のとおり報告いたします。
なお、下記記載の内容については相違ありません。

記

1. 派遣先：都市名 ボローニャ (国名 イタリア)
2. 研究課題名 (和文) : 都市ハランのサービア教とサービア教徒について
3. 派遣期間：令和 3 年 11 月 3 日 ~ 令和 4 年 1 月 31 日 (90 日間)
4. 派遣先機関名・部局名：ボローニャ大学・哲学コミュニケーション学科
5. 派遣先機関で従事した研究内容と研究状況 (1/2 ページ程度を目安に記入すること)

2021 年 11 月 3 日にボローニャに到着し、受入教員であるボローニャ大学の M. Martelli 教授のオフィスに客員研究員としてデスクを与えられた。それから研究課題の「都市ハランのサービア教とサービア教徒」について、同教授とミーティングを持った。

北シリアの都市ハランは、古代メソポタミアからイスラームの時代まで 3 千年以上の歴史を有する都市であり、イスラーム期にこの都市の人々はサービア教徒を名乗っていた。そのため、長い歴史を持つハランのサービア教は、多層多様な性格を持っており、採用者は、その様相の解明に困難を覚えていた。特に、ハランのサービア教は、古代メソポタミア文化とギリシア思想の影響を受けた星辰崇拝を特徴としていたと考えられ、その調査のための資料を探していた。

事情を知った Martelli 教授は、E. Villey や S. Redouf 等の論文を紹介してくれ、そのおかげで、ハランの星辰崇拝と関わる古代末期のシリアの天文学についての知見が増した。また、彼の指導により、サービア教研究に欠かせない一次資料である 13 世紀スペインの *Ghāya al-Ḥakīm* 関連の資料を得ることができた。現在、それらの論文や書籍を読んでいる。

また Martelli 教授の主催する AlchemEast という古代メソポタミアからイスラーム期までを貫く科学史の研究プロジェクトのミーティングに参加した。ミーティングを視聴し、事前に配布される詳細な資料に目を通すことで、古代から中世までの科学史の壮大な流れを把握することができた。これは誠に貴重な体験であった。

6. 研究成果発表等の見通し及び今後の研究計画の方向性 (1/2 ページ程度を目安に記入すること)

Martelli 教授の勧めもあり、博士論文の一部となる予定の内容を英語の論文に仕上げた。これが今回のボローニャ大学滞在における大きな成果の一つと考えている。これによって、ある神を祀る祭儀が古代メソポタミアの時代からイスラーム期まで数千年間生き延びていた連続と変容の様相を、古代から中世にかけての文献資料を比較・検討しながら分析した。

教授は論文に丁寧な目を通してくれ、帰国前にミーティングを設定してくれた。それにより、いくつかの非常に的確なアドバイスを与えられた。そのようなアドバイスを参考にしながら、この英語論文を修正して、学術雑誌に投稿するつもりである。また古代シリアの天文学・星辰崇拝に関する論文や文献資料、*Ghāya al-Ḥakīm* のアラビア語原典とラテン語訳を読み進める。それらを古代メソポタミアの星辰崇拝に関する文献資料の内容と比較する。

さらにサービア教を背景に9世紀のバグダードで活躍した、サービト・イブン・クッラ (826-901) のようなハラン出身のサービア教徒の活動について検討する。特に、サービトとその子孫の伝記と学術的活動について詳細に調査する。またやはりハラン出身の天文学者バッターニー (850?-929) についても調査を行う。

このような調査を続け、ハランのサービア教の性格を分析する。

以上のようなことから、今後執筆予定の博士論文の内容を草案にまとめて、Martelli 教授に見ていただき、アドバイスを得ながら、書き進めていくつもりである。同時に、ボローニャでの成果を基に、2022年度中にハランのサービア教と星辰崇拝についての学会発表も計画している。

また今後も、Martelli 教授の主宰されている ArchemEast のミーティングにオンラインで参加させていただき、古代メソポタミアからイスラーム期までを貫く研究のメソッドを学んでいきたいと願っている。

7. 本プログラムに採用されたことで得られたこと (1/2 ページ程度を目安に記入すること)

ボローニャ大学の優れた研究者たちとの交流こそが、このプログラムによって得られてきた最大の成果であろう。コロナ禍の中でも、彼らと直接交流できたことで、日本にいただけでは知ることのできなかった欧州の学風や研究法に触れることができた。なにより、教授や研究者たちから有用な参考資料を多数紹介してもらえたことが大きい。

また月に2度の AlchemEast のミーティングに参加し、Martelli 教授からの指導を受けることによって、日本では研究の方向性について行き詰りかけていたところに、確かな指標を見出すことが出来た。

ボローニャから外に出ることはなかったが、大学図書館で貴重な資料を閲覧し、博物館や美術館、教会において考古遺物や絵画等についての知見を得た。展示されている古代エジプトやローマ時代、中世の考古遺物、貴重な写本の数々が、今後の研究成果の的確な伝え方についてのヒントをくれた。

さらに欲しい資料について司書や学芸員へ要望する機会が多々あったため、言葉を工夫して用いるスキルやコミュニケーション能力も上がったと思う。

イタリア出国前夜には、大学近くのオペラ劇場でプッチーニのオペラ「トスカ」を観覧し、トスカやカヴァラドッシ、スカルピアなどの登場人物の姿に圧倒され、魅了された。

このようなことから、専門分野は言うに及ばず、古代から近現代までのイタリアの文化・歴史への造詣を深めることができた。

誠に本プログラムに採用されたことで、欧州の学風に触れ、今後の研究の指針を得られたのみならず、文化・歴史・芸術への理解を身に着けることができたのである。